朝鮮族のプロサッカー文化の実践と日常のポリティクス
――「サッカーのある暮らし」の再構築過程に着目して――

洪　龍日

1　本稿の目的と問題の所在

1.1　少数民族の「日常文化」と「朝鮮族サッカー」

本稿は，現代中国のエスニック・マイノリティの研究に「日常文化」の視点を持ち込むことで，これまで捉えきれなかった生活世界のリアリティの一断面を明らかにすることを目標としている。具体的には，55 の少数民族のひとつに位置付けられている朝鮮族のサッカー文化をめぐる実践を取り上げ，その実践様式の裏面に内在する多様な意識や行動を，現代中国の政治社会の文脈の中で捉えていくこととしたい。

日常の文化のあり方に着目しようとする問題意識の背景には，中国共産党の国民統合の圧力を生き抜くための少数民族の生活戦略を捉えた研究が，多くの場合「主体民族」(1) と「宗教問題」の文脈から捉えているため，共産党の民族ガバナンスと少数民族の日常の生活世界及び実践の間で不可視化された「一般国民」としての生き方が見えにくくなっていることへの危惧がある。

現代中国における「民族問題」の国際化が進むにつれ，分離独立や宗教問題と複合的に絡んでいる「主体民族」への執拗な学問的関心があったからこそ，「民族問題」の歴史的文脈が明瞭になったのはいうまでもない。また「主体民族」をめぐる動向によって中国共産党の国家政策や政治体制のあり方が問われる場合もしばしば見受けられる (2)。そのため，現代中国の民族ガバナンスの全体像を捉えるうえで，「主体民族」は有用かつ重要な枠組みにほかならない。しかし，相対的に学術的な関心度が低かった他のおよそ 50 の少数民族の中には，既存の枠組みでは捉えきれない「盲点」が十分に残されているように思われる。というのも，一見弾圧的なイメージが強いにもかかわらず，大多数の少数民族の住民の日常は漢族のそれとほとんど区別がつかない「一般性」(一般国民としての性質) を持っており，従来の「少数民族対漢族」、あるいは「少数民族対中国共産党」という二項対立的な見方では捉えにくいからである。そのため，大抵，「民族的身分」を忘却しているように見えるほど，一般国民としての生活を送る場合が多いという「一般性」を踏まえた上で，更に偶然な出来事や一部の特殊な文化現象を契機に、互いに触発し合いながらエスニシティが顕在化する状況に注目すべきなのである。本稿では，そうした「少数民族」としての自己認識や世界観が観察できる状況を，様々な行動や実践原理が微細に織り込まれている日常的実践としての文化の中で探っていきたい。

以上のような問題意識を踏まえ，本稿では少数民族の「日常文化」に着目すべく，研究

対象として朝鮮族のサッカー文化の実践を実証レベルで取り上げたい。さらにサッカーにまつわる「日常文化」の生成過程やその実践様式に内在するエスニシティに焦点を当てることで，主な他者である漢族との関係性を浮き彫りにし，日常の生活世界におけるエスニック・ポリティクスの一断面を炙り出していく。

それでは，なぜ「朝鮮族」，「サッカー文化」，そして「実践」なのか。まず，朝鮮族は55の少数民族から見れば分離独立や宗教問題などからの絡みもなく，相対的に地味なエスニック集団ともいえよう。しかし，大多数の少数民族とは異なり近代以降に中国に移住したエスニック集団であるという希少性と今日も引き続く著しい移動性という特質は，グローバル時代の「少数民族」と国家の関係性を問い直すうえで新しい知見を提供できると考えられる。次に，後述の通り朝鮮族社会においてサッカーは，自らのアイデンティティ政治を展開するうえで特別な文化として位置付けられてきた。「満洲」への移住初期から，サッカーは集団内部において，村，学校，地域をつなぐ「娯楽」，「日常のスポーツ」としての属性を保持してきた。他方で，集団外部，つまり移住と定着の歴史の中で経験することとなる「満洲国」，「中華人民共和国」といった多民族国家の領域内では，自らのエスニシティを表現する手段として機能している。特に，朝鮮族の人々が「ウリ（我々の）チーム」と呼ぶ，中国唯一の少数民族のプロサッカーチームが創設されることによって，従来の「サッカーのある暮らし」に見られる日常性には，国民統合や同化という圧力を生き抜くうえでの様々な政治的色合いが付け加えられてくるのである。最後に，実践とは社会的に構成され，慣習的に行われているこのような行為や活動を指すが[3]，本稿で取り上げようとするサッカーを取り巻く実践は，制度や国家指導者の観念といった政治的な次元，サッカーにまつわる言説及び人々の行為が交差しせめぎ合う中で絶え間なく生成・再構築される文化現象を通じて観察可能になる。いわば，文化が生み出されるプロセスの中には，必然として集団現象としてのコミュニティ実践が内在するのである。

1.2　先行研究

以下，現代中国におけるエスニック・マイノリティの生活世界の全体像たる「少数民族文化」（以下，「民族文化」）に対するマクロなアプローチからミクロな領域における日常的な実践をめぐるポリティクスまで，さらにグローバルレベルにおけるスポーツとエスニシティ関連の先行研究へと辿ることにより，本稿の具体的な課題を提示する。

まず，「民族文化」に着目した先行研究は枚挙にいとまがないが，基本的に「伝統」としての風習や民間の芸術などを中心的に論じられてきた。少数民族の文化を網羅的に論じた代表的な研究として，国家民族事務委員会の主導のもとで周明甫・金星華が編纂した『中国少数民族文化簡論』[4]と金星華が編纂した『民族文化理論と実践』[5]が挙げられる。両書とも文化人類学における文化概念を忠実に踏襲しつつ，「民族文化」に対する国家方針を体系的に整理している点に参考価値をもつ。しかし，「中華文明」の構成要素として継承・保

存すべき党主導の「文化観」が相まった結果，中央レベルの政策や方針が強調されすぎる一方で，文化の担い手としての民衆レベルの主体的な行動は捨象されてしまうことになった。このような先行研究の傾向について，紅桂蘭は，「民族文化」に対する国家の意図と政策の受け手として少数民族側の実際の対応が読み取れないと指摘している。モンゴル族の民間芸能のひとつである「アンダイ」文化を研究した紅は，「民族文化」の中華文化への包摂，文化面における国民統合の過程を検討したうえで，モンゴル族の芸術団体が国家の文化政策を変則的に受容しつつ，従来の宗教的要素を排除した「新アンダイ」を「創作」していく下からの実践過程に注目した[(6)]。とりわけ，文化を生成的なものとして捉え，「民族文化」をめぐる国家と少数民族側のそれぞれの思惑を実証レベルから解明した紅の試みは，既存の研究と一線を画すものであった。

次に，日常の生活世界における実践をめぐるポリティクスを捉えた研究の領域はどうだろうか。現代中国の複雑な社会的・政治的状況を乗り切るために日常レベルでどのような戦略をとっているかについて論じた研究は，主に宗教的背景をもつ少数民族の住民たちの生活世界に焦点を当ててきた。例えば，別所は，チベット社会の基層に伏在する先行条件，すなわちチベットの村落生活に根付いているチベット人牧畜民の「不殺生」の規範とその実践に注目し，国家・政府と直接対峙する抗議活動とは異なる位相で，村落生活の日常に生じる微細な変化の生起過程に目配りすることの重要性を喚起した[(7)]。また，小西は，四川省シャルコク地方のチベット社会の動態について，ボン教僧院の僧侶に着目し，観光産業開発による経済発展や社会の流動化の中で，日常の宗教実践の場が如何に立ち上がり存続しているかを論じている[(8)]。他方で，奈良は，雲南省における回族による地域横断的なイスラーム学習活動の事例を取り上げ，宗教統制の度合いの異なる地域のあいだを動くことで，当局からの取り締まりの対象となるリスクを抑えようとする，言わば「ポリティクスの回避」という宗教実践の様相を明らかにしている[(9)]。さらに，少数民族の日常政治に関わる最新の成果として，Stroup の研究があげられる。Stroup は奈良と同様に回族の移動性に注目し，移住が回族であることの意味を変えつつあり，権威主義に対抗する方法として使われる可能性さえあると指摘する。その上で Stroup は，変化する都市景観（都市開発）と権威主義的統治の戦術との複雑な相互作用が，回族エスニシティの日常的な表現にどのような影響を与えたかを，言語（アラビア語の識字），結婚，信仰など，日常生活における実践事例から明らかにしている[(10)]。

最後に，本稿の具体的な議論の対象であるサッカー文化をめぐるポリティクスに関連する研究である。サッカーだけでなく，スポーツ研究全般の傾向とも言えるが，とりわけ集合的アイデンティティに関連する分野はナショナリズムと高い親和性を有してきた[(11)]。但し，熱狂する人が集結するということは，その熱狂のエネルギーが，特定の政治的指向，抑圧と差別を告発したり疎外された政治的議題を表現する手段として機能する可能性も併せ持つ。その時，スポーツは単なるナショナリズムの領域だけでなく，国民国家内部で下

位集団をなす「少数民族」のエスニシティが顕現される空間ともなり得るのである。特に，近代スポーツの盛行をもたらした植民地時代の帝国内部において，エスニック・マイノリティの選手やチームが表象したのは国家よりも彼（女）らが代表するエスニック集団であった。例えばサッカー研究の領域に限って見る場合，Routledge 社が企画・出版したスポーツ研究の集大成とも言える *Sport in the Global Society – Contemporary Perspectives* シリーズ（全85巻）のサッカー関連のコレクションがあげられよう。Hughson and Skillen 編 *Football in Southeastern Europe* (12)，Hassan 編 *Ethnicity and Race in Association Football* (13)，Bandyopadhyay 編 *Why Minorities Play or Don't Play Soccer* (14) がその代表的な研究である。Hughson と Skillen の編著は，旧ユーゴスラビアが分裂して以来，バルカン半島諸国におけるナショナリズムの復活，地域をめぐる緊張，和解のための取り組みなど，様々なアジェンダの中でサッカーが如何に文化的場として機能したかを分析した。また，Hassan の編著は，アイルランドやアメリカ，南アフリカなどにおいて，人種差別問題や移民マイノリティに対する社会統合のための施策としてサッカーが用いられる事例を提供している。一方，こうした一連のコレクションの中で，Bandyopadhyay の編著は特に注目すべき成果である。サッカーがマイノリティのナショナリズム，人種，エスニシティ，宗教，コミュニティ，ジェンダー，文化的特質を示す指標として広く機能し，さらに様々な抑圧社会を生きる上でアイデンティティ政治の手段として如何に機能しうるかを検証した Bandyopadhyay らの研究は，本稿の議論の方向性と比較的一致していると言えよう。

以上で，3 つの領域からいくつか注目すべき先行研究を概観した。生成的観点から「民族文化」の再構築プロセスを明らかにした紅の研究，宗教的背景をもつ少数民族住民たちの日常実践をめぐるポリティクスを緻密に分析した Stroup や日本の「中国ムスリム研究会」のメンバーたちによる成果，そして人種やエスニシティの領域を越えた様々な文脈におけるマイノリティたちの主体性に着目しつつ，グローバルレベルでサッカーの社会的機能を解明した Bandyopadhyay らのコレクションは，本研究に示唆に富む知見を与えている。但し，現代中国の少数民族を取り巻く政治状況のダイナミズムを映し出す研究を進化させるべき余地があるとすれば，大多数を占める「地味」な少数民族住民たちと「平凡」な日常生活に対する更なる考察であろう。そこで本稿では，宗教問題や分離主義との絡みもない地味なエスニック集団たる「朝鮮族」を研究対象として，世界で最も人気のある大衆スポーツとされるサッカー (15) を巡って現れる日常実践のポリティクスを，文化の視点から明らかにすることとしたい。さらに上述した先行研究ではほとんど問題視されてこなかった，文化と呼ばれ意味づけられるある出来事や現象それ自体に改めて光を当て，文化というプロブレマティークをエスニック・ポリティクスの領域で見出していきたいと考えている。その際，文化の実践領域にまつわる具体的な事実や現象を取り扱うことにとどまるのではなく，文化と呼ばれる現象を支えている様々な主体の「発話の位置」，「立場性」を見つめ直し，またそこに内包される亀裂を文化が生み出される「場」において解明する (16)。

2　分析視角と研究方法

2.1　分析視角

以上の問題意識と先行研究の状況に鑑み，本稿ではとりわけ，文化を「場」の概念として捉えた富山の視点を踏まえながら，「朝鮮族サッカー」にまつわる様々な現象とその意味を分析したい。本稿の分析視角としての文化は，前述の通り，いつの間にか「文化」と言われ意味づけられて変わらない価値として固定化されるものではなく，むしろ，生産され消費され続ける構築的なものである[17]。さらに，特定の「場」に現れることで，文化は自らの存続を納得させる。ただし，この場では必ず何らかの制度，その制度と相互依存する言説，それらによって支えられつつ，またそれらを具体的に個別化する主体（行為者）が交錯している[18]。

このような文化のあり方，つまり文化の顕在性を制度や言説，日常の行為の交錯する「場」に見いだす視点こそ，本稿が「少数民族」と呼ばれる現代中国のエスニック・マイノリティ研究に「文化」を持ちこむ所以である。中国の少数民族を対象にしてきた多くの研究は，端的にいえば様々な「政治現象」の中で現れる「一般性」，自然な生活様式の中での「政治性」（少数民族としてのエスニシティ）が釣り合う日常のリアリティを十分に掘り出していない。そのため，国家や政治にまつわる「大きな物語」と少数民族の人々の「日常」という「些細な物語」が織り出す「網の目」を，制度・言説・行為の交錯点に発生する亀裂の中で自らの姿を現す文化を通じて垣間見る視点は非常に重要である。

それでは，果たして①サッカーというスポーツは，朝鮮族の人々にとってどのような意味合いを持っているか，②サッカーにまつわる様々な実践様式や意識が，如何なるプロセスを経て「文化現象」として立ち現れるのか，③そうした文化の生成過程において，サッカーを取り巻く言説，「文化的記憶」，他者認識（主に漢族に対する），民族政治に関する認識は如何なるかたちで表出・作動するのか。本稿では，こうした具体的な問いに答えるべく，朝鮮族のプロサッカーチームが中国プロリーグ 2 部で優勝し，一気に朝鮮族社会の「熱狂現象」を演出した 2015 年から 2019 年までの時期に注目し，質的調査による実証分析から明らかにする。

2.2　調査概要

ある文化現象を動態的な構築物として捉えるためには，その現象を担っている様々な行為者，そこに作用する制度，さらにはそれを問題として語る主体など，数多くの構成要素の布置の把握が必要となる[19]。こうした課題に向けて，「朝鮮族サッカー」に関する政治界や言論界及びオピニオン・リーダーの発言，報道，公刊文献と，一般社会の人々に対して行った質的調査によるデータを交差的に検証していく。

これまで筆者は，一般社団法人・在日朝鮮族サッカー協会の事務局のメンバーとして活

動する傍ら，2015 年より日本や中国現地でフィールドワークを実施した。そして様々なサッカー関連団体，コミュニティに対して参与観察を行いつつ，その担い手 25 人へのインタビューを実施してきた。調査期間は，①構造化インタビュー（16 人）の場合，2016 年 8 月から 11 月までの 4 ヶ月間，②面談・聞き取り調査（9 人）の場合，2 回にわたって実施した。それぞれ，2016 年 8 月から 2017 年 9 月まで（第 1 次調査），2021 年 11 月から 2022 年 4 月まで（第 2 次調査）の期間に及ぶ[20]。調査対象者の選定には，①主にプロリーグ初期である 1990 年代の記憶を持っており，オン・オフライン両軸においてコミュニティ活動のあり方に影響を与えている 20 代から 40 代までの年齢層，②居住地の分散[21]，③外地（中国・海外）での生活経験を持っている帰郷者，④職業の分散[22] など，多方面にわたる基準を設けた。

表 1　調査対象者の基本情報①：構造化インタビュー

表記	年齢	性別	出身地	居住地	職業	備考
A	20 歳代	男	延辺	ペンシルベニア州	大学院生	
B	30 歳代	男	延辺	北京	IT 技術者	大手ゲーム会社
C	30 歳代	女	延辺	埼玉県	会社員	アメリカ系コンサルティング会社
D	30 歳代	男	延辺	延辺	大学教師	サッカーコミュニティ管理者
E	20 歳代	男	延辺	延辺	公務員	人民解放軍出身
F	20 歳代	男	延辺	大阪	プロサッカークラブ・スタッフ	J1 クラブ所属
G	30 歳代	女	延辺	上海	作家	オピニオン・リーダー
H	30 歳代	女	延辺	延辺	編集者	出版社職員
I	30 歳代	男	延辺	延辺	作家	ラジオ MC
J	40 歳代	女	延辺	シンガポール	主婦	日本とシンガポールを往来
K	40 歳代	女	延辺	延辺	教師	
L	30 歳代	男	延辺	上海	会社員	
M	30 歳代	男	延辺	延辺	個人事業者	サッカー関連のラジオパネル
N	30 歳代	男	延辺	延辺	個人事業者	
O	30 歳代	男	延辺	延辺	公務員	自治州政府
P	30 歳代	男	延辺	延辺	会社員	

表2　調査対象者の基本情報②：面談・聞き取り調査

表記	年齢	性別	出身地	居住地	職業	データ取得日	備考
KJ	30歳代	男	延辺	東京	大学院生	2016.9.10 2017.8.5	
YT	30歳代	男	延辺	延辺	会社員	2017.8.25	ラジオパネル，サッカーコミュニティ管理者
SK	40歳代	男	延辺	延辺	会社員	2017.9.4	延辺プロサッカークラブ・スタッフ
HK	30歳代	男	延辺	延辺	会社代表	2016.10.5 2017.8.27	日本留学から帰郷
RJ	20歳代	男	延辺	上海	個人事業者	2016.8.27	積極的にコミュニティ活動に参加
GK	40歳代	男	延辺	延辺	記者	2021.11.22	テレビ局
HR	30歳代	女	延辺	延辺	記者	2022.3.18	K新聞社
PH	40歳代	女	延辺	延辺	記者	2022.3.18	Hメディア
KR	40歳代	男	延辺	延辺	記者	2022.4.8	J新聞社

3　プロ化する「朝鮮族サッカー」と制度的基盤

3.1　中国プロサッカーリーグにおける「延辺サッカークラブ」の浮き沈み

まず延辺のサッカークラブが，少数民族としては唯一，プロ化の道を歩んできたその歴史的文脈を掻い摘むことで，制度あるいは政治的要因が如何に「朝鮮族サッカー」のあり方に影響を与えてきたかを概観したい。

1978年の鄧小平の改革開放宣言をきっかけとして，中国ではスポーツ分野における対外交流が活発化し始めた。西欧のスポーツ理念，先進的なトレーニング方法，プロスポーツの運営や管理ノウハウに関心を寄せ，吸収し始めたのである。80年代の中国は，様々な分野で世界の先進的な事柄を学ぼうとする積極的な姿勢を見せるが，1992年には中国サッカー協会が北京・紅山口で会議を開き，プロサッカーリーグの発足を公式に計画する。その後，2年あまりの準備過程を経て，日本のJリーグ発足より1年遅れること1994年，中国プロサッカーリーグ（1部の甲Aリーグと2部の甲Bリーグ）がスタートする[23]。

一方，延辺のサッカークラブも，中国プロサッカーリーグの発足メンバーとして，1部リーグに参加するようになった。プロリーグに参加した唯一の少数民族チームであった。今やグローバル企業として成長した，韓国・サムスンやヒュンダイグループが初期スポンサーとなり，中国市場で徐々に知名度を高めていく。1997年には元韓国代表監督・崔殷澤の指揮の下，1部リーグ4位という好成績を収め，朝鮮族社会を熱狂の渦に巻き込んだ。この

ように，92 年の中韓国交正常化以降，韓国社会とのつながりも，プロサッカーという舞台を通じて現れるようになる。

しかしプロリーグの進展とともに，「黒いホイッスル[24]」と呼ばれる，辺境の少数民族チームへの差別的な判定が相次ぎ，2000 年には 2 部リーグへの降格を余儀なくされる。さらに 1 軍チームが浙江省の杭州緑城 FC に売却されるなど，朝鮮族ファンの心に忘れられない傷を残す事態が続く。その後，ユースやリザーブ選手らによってチームは再編されたが，01 年から 14 年まで，3 部と 2 部リーグを転々とする歳月が続いた。いわば「暗黒期」として今でもファンの間で膾炙する時期が続くことになるのだが，ホーム戦でも観客動員ができず，朝鮮族社会からほとんど関心を向けられていなかった[25]。

3.2　習近平政権下の「政治サッカー」と延辺――2 部リーグ優勝からスーパーリーグへ

そうした中，大きな転機を迎えたのは 2015 年シーズンである。本来ならこのシーズンは 3 部リーグに参加する予定であった。その前年に，頻繁な監督交代などの影響を受け，3 部リーグへの降格が決まっていたのである。クラブは 2014 年 12 月に，2 部リーグへの再昇格を目標に掲げ，元韓国代表のヘッドコーチ朴泰夏監督を招聘した。ところが，2015 年シーズンに向けて準備している最中，チームに予期せぬ幸運が訪れた。2 部リーグの「広東日之泉」が給与未払い問題を改善できず，リーグ戦参加資格を取り消され，前シーズンに降格した延辺チームが「補欠昇格」することとなる。そこで，朴監督は 2 部リーグでキャリアをスタートしたが，穏やかな人柄と韓国代表チームで磨き上げてきた指導力がチームをまとめ上げ，第 21 節まで無敗記録を伸ばすという圧倒的な強さを見せる[26]。さらに，延辺チームは，同シーズンの 2 部リーグで王座を奪還し，悲願だったスーパーリーグ昇格を達成した。このような予期せぬ活躍に，国内外の朝鮮族社会は直ちに熱狂の雰囲気に囲まれる。リーグ戦のある日は，国内外を問わず W 杯のような風景を演出した。特に，ホーム戦のある日は，3 万 5 千人が収容できる「延吉人民体育場」に平均 3 万人以上の観戦者が入場し，街の飲食店はサッカー中継が見られる大型 TV を設置するなど，サッカーは延辺の日常風景を一新したのである[27]。

また，国内の政治的要因が延辺サッカーの再起に影響を与えていた点も注目すべきである。とりわけ，スーパーリーグへの昇格を影から支えたのは，2015 年からメインスポンサーとなった，中国屈指の保険会社「富徳生命保険」による投資である。長年にわたって，資金の調達に苦しんでいた延辺のために，吉林省のトップポストの党書記が直接，広東省の企業である富徳グループに連絡し，チームとマッチングさせたのである。このことは中国サッカーにまつわる党中央の意志が反映されたものと捉えられるが，とりわけサッカーの国際レベル化を強く進める習近平政権発足以降，中国の財界に対してはサッカーの発展にある程度の貢献が求められる雰囲気が形成されていた。

こうした状況の中で，中国東北地方の辺境の少数民族チームと，中国最南端地域の大手

企業とのパートナーシップが電撃的に実現したのである。「サッカー好き」と知られる習近平はイギリスやドイツなど，ヨーロッパのサッカー先進国を国賓訪問するたびに当地のクラブを訪れる[28]。さらに，こうした習氏の「サッカー・ジェスチャー」は外交舞台にとどまらず，国内政治の領域においても強調されはじめた。2015 年 2 月 27 日に開催された「中共中央全面深化改革領導小組第 10 次会議[29]」で習氏は自ら会議を主宰し，『中国蹴球改革総体方案』を通過させた。この会議で中共中央指導部は，「中華民族の偉大な復興を実現する「中国夢」と「体育強国夢」は直結する事業である」と唱えた[30]。長年市場経済にふさわしいプロ化の深化を掲げてきたものの，依然として政府の強力な行政的関与から抜け出せない中国サッカーはとりわけ，習政権以来，中央政府のスローガンである「中国夢」の実現と緊密に結びつく政治的手段として機能したのである。

このように，2010 年代の中国サッカーは，国家権力と巨大資本という 2 つの軸が交錯する「模式」をとってきたが，その根底には「中国夢」を実現するうえでスポーツのもたらし得る，ナショナリズムの高揚を基盤とした国家統合の目標があったといえる。一方で辺境の延辺チームは，そうした「政治サッカー」に恵まれ「再起」を果たすこととなるが，それはある意味で国家の目標とは矛盾する，すなわち，エスニシティの高揚をもたらす「文化現象」を生み出したというもうひとつの側面も併せ持っていた。次節で具体的にみよう。

4　「朝鮮族サッカー」を取り巻く言説

上述したように，延辺のサッカーチームが 15 年ぶりにスーパーリーグに昇格したことをきっかけに，一挙に朝鮮族社会の注目を集めた。ホームタウンである延辺自治州だけでなく，北京，天津，江蘇・浙江・上海（江，浙，沪），広東などの国内の主たる集住地，そして韓国，日本，米国といった海外の主要移住地でも，故郷のサッカーチームの活躍に熱い関心と支持を寄せる集団現象が巻き起こる。但し朝鮮族社会のサッカーに対する関心と熱狂は，2015 年以降の現象ではなく，過去においても断続的に立ち現れた現象であった。というのも，過去においても全国大会などでの活躍ぶりによって，サッカーは様々な場面において延辺地域や朝鮮族を代表する文化として位置付けられてきたからである。

この点は，文化界・政治界の高位幹部であった蔡永春氏の回顧録からも確認できよう。2004 年から 2010 年にかけて延辺朝鮮族自治州党委員会宣伝部常務副部長を務めた蔡氏は，「60 年代初期の延吉では，全国規模の大きな試合が多く開かれ，特に全国サッカー連盟のリーグ戦が行われる日の風景は未だ忘れられない」としつつ，「観客がもやしのようにぎっしり座っていた延吉市人民体育場の奇抜な風景は神秘的だった」と幼少期の風景を振り返る。蔡氏は，州党委の高官に就くまでにはメディア界（延辺テレビ局局長，延辺新聞出版局局長など）に従事した。「90 年代から私を含む放送人たちは，サッカーを単なるスポーツにとどまらず延辺の至尊を高揚させる情熱文化へとグレードアップする野心を持っていた」とする蔡氏

は，官職を引退して以降も多数のサッカーコラムや回顧録を発表してきた[31]。

また，吉林省の党機関紙『吉林新聞』で長らく記者を務めてきた金太国氏は，「朝鮮族はよく，サッカーは延辺，ひいては中国朝鮮族の文化現象，精神的支柱，自尊心，財産だと述べるのに躊躇わない」と指摘する[32]。サッカーに対するこのような認識は，政治家の発言からも確認できる。延辺朝鮮族自治州政府の現任州長洪慶は，副州長時代の2015年に，「サッカーの発展は一貫して自治州政府の民生事業と見なされ，サッカーは延辺ですでに生活様式，文化伝承，精神結集となり，辺境，民族団結を強固にする重要な媒体となっている」という認識を示している[33]。

こうしたサッカーを取り巻く文化界，政治界の言説の背景を考察する際，州長が「民生」問題と関連づけていることから見て取れるように個人の感情というよりも，朝鮮族社会で広く共有される普遍的な認識[34]を踏まえての政治的な立場であることは注目すべきである。

それでは果たして，サッカーが朝鮮族の「民族文化」として認識される背景にはどのような記憶と経験が働いているだろうか。文化の生成・伝承を考えるうえで「記憶」は重要な意味をもつ。なぜなら，ある人間集団に見られる特定の行為や慣習及び価値観などが，世代を重ねる中でいつの間にか「文化」として語られる現象は，ある「物事」に対する個人及び集団レベルの記憶と密接につながっているからである。

記憶の社会的意味を研究したJan Assmannは，記憶の中でも特に文化的記憶を強調する。文化的記憶は，歴史や神話という時間の枠内で作動しており，文化的アイデンティティの土台となる記憶である。とりわけ，長い歳月をかけて形成した後には生の「正典」(canon)のように働くとJan Assmannは指摘している。なぜなら文化的記憶は社会的に合意されているだけでなく，文化的意味を獲得してから絶えず再現され伝承されるからである。すなわち，文化的記憶の要は，「記憶は文化的に再構成され文化の機能を遂行し，これに基づいて文化的実践を行う」ことである[35]。

本稿の構造化インタビューの調査対象者16人，面談・聞き取り調査対象者9人は，いずれもサッカーに対する幼少期の記憶と体験を持っていた。その記憶の中で，とりわけ「延辺サッカー」の全盛期と言われる崔殷澤監督時代（1990年代半ば）の体験を強調する人が多い。「辺境の弱小な少数民族クラブであったにもかかわらず，リーグの最強チームを相次いで破り，「巨人殺手」（大物ハンター）の姿を見せた」（L氏）時期であったからである。「父がサッカーファンではなかったため，家族全員がサッカーにあまり興味はなかった」というC氏にとっても，当時は，「試合結果や順位だけはチェックしていた」時期であった。A氏の場合，家族は皆熱心なファンだったが，本人はサッカーに関心がなかった。でも彼は，「サッカーの熱気が非常に高まっていた時期であって，家の大人たちは，延辺チームが勝つと嬉しいから酒を飲み，負けたら悲しくて酒を飲むとよく言っていた」と小学生時代の思

人民日報　2015年9月29日 星期二　15 体育

每个县市都有联赛，年底还有全州冠军赛

在延边，足球是一种生活方式

足球传统

足球人才

足球交流

珍惜体育精神

环中国公路自行车赛10月鸣枪

全民健身操舞大赛总决赛落幕

図 1 『人民日報』の「延辺サッカー」記事（2015.9.29, 15 面）

い出を述べる。サッカーへの関心の有無にかかわらず，彼（女）らは幼い頃，特に 90 年代を「熱狂」の時代と記憶している。

一方，A 氏と C 氏以外の調査対象者は，家族や友人と一緒に直接スタジアムに出入りしただけでなく，特に男性の場合，監督や選手，戦略について議論し，放課後にも友人とサッカーをする頻度が増えていたと語る。また，「農家をしていた母親は熱心なサッカーファンだったので，試合のある日は村のおばさんたちが我が家に集まって，ビールを飲みながら中継を見たりしていたのを覚えている」と，P 氏は幼い頃の隣人たちとの楽しい思い出に触れている。また，調査対象者のほとんどが，小学生あるいは中学生の頃だったため，サッカーと「民族」を結びつけて考えることは見受けられなかった。「延辺では，朝鮮族なら日常や学校生活のなかでサッカーをするのは当たり前のことだったので，特別に考えるきっかけ自体がなかった」（RJ 氏）からである。「幼い頃からサッカーが好きで，またちょうど地元にプロチームがあったので，「自然的に」ファンになるしかない環境だった」とする B 氏は，「北京の大学へ進学するため故郷を離れるまでは，単純に自分のチームだったから応援」していた。しかし，彼はのちに「異郷で生活する中で，いつの間にか朝鮮族社会では，「延辺チーム」がサッカーそれ以上の意味があることに気づく」経験をすることになる。彼は，「延辺は，朝鮮族という修飾語を除けばほとんど存在感がない地域なので（中略）幸い「長白山」（白頭山）とプロサッカーチームの存在があって，自分の出身地と朝鮮族という身分を示すのに効果的だった」と述べている 。

しかし，調査対象者が思い出すサッカー関連の記憶には，必ずしも楽しくてポジティブな一面ばかりであったわけではない。今日も多くのサッカーファンが口にするような，チーム売却（2000 年）以降の「暗黒期」に対する言及には，少数民族としての立場を意識しはじめるきっかけとなったという，幼少期の記憶が含まれている点が特徴的である。チームが降格・売却される 2000 年当時，10 代前半だった調査対象者は，「サッカーの話が出ると家族の雰囲気が暗く落ち込んでいった」（F 氏）とその時代を回想した。他方で，当時 10 代後半以降の調査対象者は，「黒哨（黒いホイッスル）が蔓延していたその時代は，金のない辺境の貧しい少数民族チームの悲哀だった」（G 氏，H 氏，K 氏），「少数民族の無力さに初めて気

づいた」(I 氏) と，当時経験した具体的な状況や感情を思い起こした。またチームが降格し売却まで至った経緯については，「少数民族の良いことを見ていられない漢族の本心，延辺の自尊心を売って腐れ金を着服しようとした情けない者たちが政府を摑み取っていたから発生した悲しい歴史だった」(I 氏) と，マジョリティたる漢族や自治州政府の民族幹部に対して反感を示す調査対象者もいた。

5　サッカー文化を実践する――朝鮮族オピニオン・リーダーの浮上と朝鮮語メディアの活性化

サッカーブームの再燃とともに，自治州高官らによるサッカー関連の発言は増加の一途を辿った。政府はサッカー事業を「民生工程」と命名し，人々の生活向上や文化福祉の増進に寄与するプロジェクトとして位置付けた。さらに，政府はサッカー事業が地域社会の調和と結束を促進し，民族団結を強化する触媒だと強調した。一方，文化界の朝鮮族オピニオン・リーダーは，「共同体」が直面している様々な状況と結びつけながらサッカー言説を展開した。とりわけ作家協会，出版界，放送界といった政府系の文化言論機関の「80 後世代」(1980 年代生まれの世代) の浮上が際立つ。サッカーファン層に限らず，国内外の朝鮮族社会においてコミュニティレベルのサッカー文化の実践が展開されたのも，積極的に言論空間を作り上げてきた彼 (女) らの影響力によるところが大きい。延辺サッカーを素材としたオピニオン・リーダーの文章は，一般的に政府系の朝鮮語メディア [36]，一部の影響力のある個人，民間団体の WeChat「公衆号」[37] を通じて拡散する。

一方，サッカーブームの再燃は，伝統的な朝鮮語メディアにも相乗効果を生み出した。リーグ戦の現場報道やクラブの動向などについて，朝鮮語メディアが報道し始めたのである。実は，その裏側にもそれぞれの事情があった。面談・聞き取り調査を実施した 4 人のメディア機関の関係者の話によると，概ね次のような事情が取り上げられている。まず，言論界では，朝鮮語メディアに対する関心が低いということを認知していた。次に，地域的に大きな話題を呼んでいたサッカー報道は，「文化」の領域であるだけに，朝鮮語メディアの裁量で自由に扱うことができる主題であった [38]。そして，サッカー関連の報道をめぐって，朝鮮語メディア間に相互競争の心理があった。最後に，サッカーを「朝鮮族社会」の現象と関連付けて浮き彫りにする面においては，「放送局」と「新聞メディア」の間にある程度の温度差が存在するということである。特に新聞メディアとは異なり，中国語と朝鮮語の 2 言語で報道しなければならない放送局の場合，一層の慎重さが求められたのである。延辺の代表的な放送局・報道局関係者の GK 氏は次のように語る。

> ニュースを制作する時は，特に朝鮮族の要素を浮き彫りにしようとはしない。外地のファンのほとんどは朝鮮族だが，現地で直接送ってもらった応援映像を流す時も，「どこどこの朝鮮族サッカーファン」だと，あえて字幕を通じて明かさない。こういった

部分は放送局内部で明確な指針はないが，それでも暗黙的なものがある。だからといってサッカー番組の製作過程が堅苦しいわけでもなく，あくまで自然なやり方だ。漢族の同僚も別に敏感に反応することもないし，外地の朝鮮族の反応もよく知っているので。外にいる人たちは，ほとんど朝鮮族だとしても，同時に「延辺サラム（人）」だから，ここで生まれ育った漢族には「父老郷親」（地元の人々への親しみを強調する表現）の感情がある。(GK 氏)

一方，新聞メディアやオンラインニュースメディアは，概して朝鮮族社会の反応を多角的に伝えようとした。自治州の某党機関紙である K 新聞社の HR 氏は，「社内に特に報道指針もなく，現場の取材記者が書いた記事をそのまま WeChat 公衆号に発表した。また，速報記事が中心だったので編集者の「審閲」（審査・校閲）もなかった」という。J 新聞（省党機関紙朝鮮語版）の場合，2014 年から朝鮮語のサッカー専門情報サイトを開設し，ホーム戦，アウェー戦を問わず，現場の迫力や生き生きとした写真，記事をリアルタイム発信してきた。それ以外にも，「女性ファン観戦席」のようなユニークな特集コラムや，50-60 年代に全国を風靡し，かつてサッカー中国代表でも活躍していた「元老」たちのオーラルヒストリー[39]，朝鮮族サッカー史などを連載することで，サッカーファンの間で人気を博すこととなる。J 新聞はまた，「朝鮮族サッカーを扱う専門的なサイトを運営していたため，別途の費用が必要だった。幸い WeChat の公衆号記事の閲覧数とサイトの訪問客が増えたので，積極的にスポンサー募集をかけた。それで獲得したスポンサー費用は，アウェー戦や海外でのキャンプの取材にあてることができた」と，KR 記者はいう。

H メディアの場合，知名度向上のため，2015 年からすべての報道の重点を延辺サッカーに置いた。このメディアは，2013 年 2 月から吉林省文化産業プロジェクトの助成を受けることになった。そして，地域の朝刊新聞（中国語）から分離し，朝鮮語のオンラインニュースサイトを開設したのである。自治州党委宣伝部の元高位幹部が顧問を務めるなど，政府機関と密接な関係を結びながら，多様な文化イベントを開催し，徐々に地域社会で存在感を示し始める。そうした中，「2015 年春からサッカーが盛り上がる気配が感知されると，編集長は全ての力量をサッカー報道に総動員するよう求めた」(PH 記者)。その後，試合の速報記事はもちろん，文化イベントの企画力という従来の強みを活かし，朝鮮族社会を対象に『私と延辺サッカー』をテーマとしたグローバル公募展を展開する。この公募展に参加した作品は，H メディアの公衆号に続々と公開されると同時に，多数の WeChat「群」（グループチャット）や個人の「朋友圏」（モーメンツ）を通して速やかに拡散された。そして，2 部リーグの優勝が決定した直後の 2015 年 12 月，自治州党委宣伝部，自治州体育局と共に H メディアは大々的な公募展授賞式を開催することとなる[40]。

朝鮮族社会の耳目を集める文化イベントを企画することで，州宣伝部の支持を得よう

とした。新生の朝鮮語メディアなだけに，生存するには資金が必要であり，また国家の助成を受けるためには必ず州政府の関係部門との関係が重要であった。幸い延辺サッカーの復活のおかげで，タイミング良く話題性の強い公募展を開けたし，「サッカー文学」の拡散という一つの文化現象を作ることができたと思っている。(PH 記者)

表 3　「延辺サッカー」関連の出版物 (2015 年以前・以降の対照表)

2015 年以前	
延辺朝鮮民族足球史編写組編（1992）『延辺朝鮮民族足球史』東北朝鮮民族教育出版社	朝鮮語
牛志偉（2005）『長白呼嘯』延辺大学出版社	中国語
2015 年以降	
申国哲（2015）『冠軍 1965』延辺人民出版社	朝鮮語
海蘭江網編（2016）『延辺足球之恋』延辺人民出版社	朝鮮語
牛志偉（2016）『超級夢想 ―― 延辺職業足球風雲録』吉林大学出版社	中国語
金竜・安相跟・金太国主編（2018）『追尋延辺足球足跡』延辺大学出版社	朝鮮語
柳青（2019）『朴泰夏と延辺サッカー4 年の奇跡』ブレインストア (韓国記者・韓国出版社による出版)	韓国語
酡冬筆（2019）『白衣民族，紅色霊魂』延辺大学出版社	朝鮮語
金青雲主編（2020）『延辺足球百年史』延辺人民出版社	朝鮮語
牛志偉（2022）『勝利延辺 ―― 延辺職業足球風雲録』延辺人民出版社	中国語

H メディアの PH 記者が指摘する通り，「サッカー文学」はこの時期の文化現象の一端を表していた。さらに注目すべきは，2015 年のサッカーブーム再燃を境に，サッカー関連の図書出版が著しく増加したことである。表 3 の「延辺サッカー」関連図書の出版状況を参照すれば明らかなように，2015 年以降の出版物はそれ以前の 4 倍に達し，ジャンルも多岐にわたる。文学作品としての手記やルポルタージュから，専門的なスポーツ研究者による歴史書まで，様々な種類の書籍が出版されている。こうした出版動向は，サッカーが単なる娯楽としてのスポーツの意味を超え，その背後の「人文知」の需要を引き出していたことを如実に示している。

以上で見てきたように，サッカーチームの活躍をきっかけに，地域の朝鮮語メディアに対する注目度も上昇するような相乗効果が生じた。「民族社会の役に立たない陳腐な朝鮮族媒体」(I 氏，YT 氏) というイメージの膠着により一般人の目線から遠ざかっていたが，サッカーにまつわる朝鮮族社会の意識と反応を可能な限り伝えたのはもちろん，オピニオン・リーダーたちの「延辺サッカーの民族性」を強調するコンテンツを流通させたのが奏功したのである。この際，党機関紙の属性を持っているとはいえ，サッカーコンテンツの生産・流通という領域ではエスニック・メディアの機能を果たしたことも明らかである。

一方，SNS プラットフォームとの結合によって，サッカーを取り巻く様々な知識と情報，発話がリアルタイムで発信・拡散されたことも注目すべきである。この過程においては，伝統メディアが企画した「朝鮮族サッカー」の歴史や「元老」たちのオーラルヒストリーなどが一種の「人文知」[41] として伝えられ，さらにオピニオン・リーダーたちの発話と節合することで，「伝統文化としてのサッカー」という同時代の言説の再構築に大きな影響を与えた。本研究の調査対象者も，サッカーを朝鮮族社会の内外部に影響力を発揮する双方向的なベクトルをもつ存在として位置付けている。そして具体的なレトリックを用いて延辺サッカーのエスニック要素を強調している部分では，オピニオン・リーダーたちの「サッカー言説」と一脈相通じる傾向を見せていることがわかる。他方で，自治州の高位幹部たちの言説が，「民族団結」，「民生工程」を強調していることからわかるように，延辺サッカーのエスニック属性は徹底的に排除される。まして「エスニック文化」の領域といっても「中華文化」という上位のカテゴリーへの言及を省略した「政治言辞」が認められないのは，辺境の少数民族地域の安定化はもとより，中華民族の共同体意識の高揚を前例なく強調している習近平政権以来の民族ガバナンスの特徴を端的に表すものと考えられる。

6　サッカーという日常文化に潜むエスニシティ――「地域」と「民族」の狭間で

前述のサッカーに対する認識と意味づけからわかるように，朝鮮族の人々にとってサッカーはエスニシティの表出空間であった。この点は，党の機関誌たるマスメディアが「朝鮮族性」が強調されるサッカーコンテンツを掲載・拡散し，様々な議論が可能な一種の公共圏を形成していくことで，「エスニック・メディア」としての機能を果たしていた事例からも見て取れる。

一方，延辺サッカーをめぐって表出されるエスニシティを考察する上で，この地域の主要住民である朝鮮族と漢族の間の密接な相互作用や関係性を見逃してはならない。なぜなら，エスニシティは自明なものとして固定不変な存在ではなく，他者との接触の中で自らの帰属意識及び他者との差異が再確認できる境界を浮き彫りにさせるような，常に，流動的かつ構築的な属性をもつからである。

境界形成の立場からエスニシティ現象を考察した Barth によれば，エスニシティとは，集団の起源をはじめとしたいくつかの文化的項目によって内集団と外集団との境界を設定する社会文化的プロセスである。すなわち，異質的な文化的背景をもつ人間同士の接触が起こる境界に，何らかの文化的項目が自ら姿を現し，他者認識やそれまでにない新しい価値を生み出す現場を形成していく[42]。公式的に朝鮮族自治州でありながら漢族住民が 6 割以上を占める延辺では，サッカーがそうした文化的境界を生み出す「場」として働いている。

本研究の調査対象者たちは，「漢族ファン」に対して概ね一致した立場を見せた。すなわ

ち延辺チームは朝鮮族だけの所有物ではなく，地域を代表してプロリーグに参加しているため，漢族ファンを排除するのは狭隘な態度であるとの認識を示した。特に，「朝鮮族人口が大量流出している状況下で，ホームスタジアムを埋めてくれる漢族ファンの熱情と団結力は見習うべき，またありがたいことであり，サッカーに興味がないだろうと思った漢族ファンにとっても，故郷のチームであることを改めて気付かされた」(43)，「延辺チームの応援歌『アリラン』(朝鮮民謡) を一緒に歌ってくれたり，オンライン掲示板やSNSなどで他チームのファンが「高麗棒子」など，朝鮮族に対する差別用語で誹謗中傷する時に，朝鮮族の味方になって戦ってくれる漢族ファンに改めて同郷人としての感情を痛感した」(44) と，好意的な立場を示す傾向が見て取れる。

但し，ここにはまた一種の明確な前提がある。彼（女）らが特定する漢族ファンは，延辺チームが朝鮮族選手を中心に運営され，朝鮮族要素を強調することに同意し理解する人々である(45)。

> 漢語を使うオンラインコミュニティで互いに討論したりする時はあっても，漢族ファンとの交流はあまりない。時々，熱狂的な漢族のファンが見受けられるが，最初は漢族が延辺チームを応援することに少し微妙な疑いを抱いていた。しかし，自分の知っている限り，ほとんどの漢族のファンは，延辺チームが朝鮮族中心であることに同意していると思う。それが分かっている朝鮮族の立場からすれば，やはり「みな同じ延辺の人だよね」，と強い同質感を感じることになる。(YT氏)

一方，サッカーをめぐって朝鮮族エスニシティが浮かびあがるもう一つの領域は，クラブにまつわる「韓国要素」に対する認識である。プロリーグに参加して以来，資金，選手，監督などといった「韓国要素」は，延辺サッカーの特色づくりや朝鮮族の「民族的情緒」にも影響を与えてきた。こうした「韓国要素」に基づくエスニック・アイデンティティの発揚は，漢族ファンとの対立を際立たせる一つの境界線を作り出す。

その代表的な一例を見よう。スーパーリーグ2年目の2017年，中国サッカー協会はリーグ開幕6週間前を控えて急激な外国人枠規定の変更に踏み切った。それまでスーパーリーグでは，1試合に「3人＋アジア枠1人」という外国人選手の出場ルールがあった。しかし新たな政策では，アジア枠を廃止しただけでなく，一試合に出場できる外国人選手を国籍に関係なく「3人」までと制限した。朝鮮族選手が中心になっているチームの特性とコストパフォーマンス重視の観点から韓国人選手を4人も採用していた延辺にとって，こうした急激な政策変更は他チームに比べて著しい戦力低下をもたらした。さらにスポンサーの富徳グループのオーナーが政治問題で「失踪」(当局による調査) することにより17年度から予算が大幅に削減されるという「悪材料」も重なり，延辺はシーズンの序盤戦を終えた第6節まで4敗2引き分けという成績で既に降格圏に陥った。

成績不振が長引くとファン層が分裂し始めた。とりわけ，韓国人監督の進退をめぐって朝鮮族と漢族のファンの間で激しい衝突が起こった。象徴的な対立は 2017 年 7 月 8 日，「重慶力帆 FC」をホームに呼び寄せた日に発生した。この試合で延辺は，同じく残留争いの対象でもある相手に 0 対 4 で惨敗し，最下位に転落する。漢族ファンが結成した組織である「焔火サポーターズ」は，試合の途中に「朴泰夏下課！」と韓国人監督の辞任を求める掛け声をかけはじめた。すると，隣のエリアで観戦していたある朝鮮族の女性ファンが漢族サポーターズの掛け声を制止しようと抗議した。さらに女性ファンの意見に賛同する周辺の朝鮮族ファンと，「焔火サポーターズ」の間で口論が交わされる騒動へと発展する[46]。

当日の試合後も，微博（Weibo）や WeChat などの SNS では，漢族サポーターズによる掛け声の騒動をめぐって対立が激化した。そして，次節のホーム戦には，上海地域を中心として結成した「江浙滬ファンクラブ」の朝鮮族サポーターズが故郷に戻り，スタジアム観客席の真ん中にチームへの応援メッセージを込めた大型横断幕を飾る。また，試合中には，彼（女）らの主導のもと，監督を応援する掛け声がスタジアムに響き渡った。

この一連の対立について朝鮮族の人々はどう考えているだろうか。延辺のある放送局のサッカー関連のラジオ番組で，レギュラーコメンテーターとして出演しつつ，クラブやファンの動態について発信していた YT 氏は，「朝鮮族社会で朴監督は最も尊敬される人物で，ただ成績不振だけで更迭させるのはクラブにとっても多大なリスクになる」とクラブ内外にまつわる雰囲気を伝える。また，朝鮮族と漢族のファンにとって韓国人監督のもつ意味合いの違いについて次のように語る。

> 15 年ぶりに念願の一部リーグへ昇格させた功績も重要だが，様々なバイアスや葛藤を抱えている朝鮮族社会と「韓国」の関係を鑑みると，朴監督が築き上げた延辺サッカーはポジティブなストーリーをつくってきたため，朝鮮族ファンは「韓国と朝鮮族の架け橋のような監督を守りたい」という意思が強かった。それに対して，漢族ファンは監督が別にどこの出身でもよく，成績だけ良ければ支持し，不振が続けば辞職させるべき，と考える傾向があるようにみえる。プロサッカーの観点からみれば漢族の考え方は間違いないかもしれないが，善かれ悪しかれ感情の溝が深い韓国との関係を考えれば，朝鮮族の人々にとって朴監督のような「韓国人」はスポーツを超える存在だ。（YT 氏）

以上で見てきたように，朝鮮族は漢族ファンの応援を友好的に受け止めつつ，またスタジアムや SNS など様々な場面での実体験を通じて，改めて「同郷人」としての地域感情を経験することになる。他方で，韓国人監督の進退問題をめぐっては両者の間に認識の違いが確認され，オン・オフラインで対立する様相を見せた。すなわち，サッカー応援の経験を通して，新たに包摂的なローカリズムが確認される一方で，一部の懸案に対する認識対

立が浮かび上がり，また新しい排他的な境界領域が生み出されつつある。サッカー文化の領域で朝鮮族エスニシティが表出され続ける理由は，まさにこうした絶え間ない「境界」の再構築から見て取れるのである。

6　結　論

本稿では，国家の統治や民族政策にまつわる「大きな物語」とは異なる位相で実践されている日常文化の一例として，朝鮮族の「サッカーのある暮らし」の再構築のプロセスを文化の生成論的観点から論じてきた。朝鮮族の人々にとってサッカーは，長らく「民族文化」と呼ばれるほど特別な存在として位置付けられてきた。「満洲」への移住から「中華人民共和国」における定着まで，さらにグローバル化の進展に伴う「大移動」の時代にも，サッカーは生活世界の中に根付く日常スポーツとして君臨してきたのである。一方，そうした移住史の中で形作られてきた「サッカーのある暮らし」は，朝鮮族プロサッカーチームの創設と共に，単なる娯楽やレジャーを超えたアイデンティティ政治の文化として，その政治的色合いも強めていく。

本稿が焦点を当てたのは，そうした重層的な意味合いをもつサッカーを取り巻く日常文化の実践の場が如何に立ち上がり存続しているかという問題であった。この際，文化の顕在性を制度や言説，日常の行為（実践）の交錯する「場」に見出した富山の知見を継承しつつ，プロリーグ初期の熱狂時代と 90 年代末期の「暗黒期」(47)，そして 2015 年以降のサッカーブームの再燃という一連の流れの中で，サッカー文化が制度や国家指導者の観念といった政治的な次元，サッカーにまつわる言説と実践が交差しせめぎ合う中で絶え間なく生成・再構築されるメカニズムを解明した。ここで注目すべきは，そうしたプロセスの中で，あたかも文化という「電球」に明かりが付いたり消えたりする状態が断続的に繰り返されるという点である。本稿では，実証研究から明らかにした朝鮮族のサッカー文化の実践事例を踏まえ，あえてこうした文化の性質を「点滅性」として捉えたい。日常空間における文化の点滅過程に着目することで，「伝統」あるいは「民族文化」と認識される言説の中身を掘り起こすことができると考えられる。また，その根底に据えている「文化的記憶」自体も，様々な利益代弁者（政治家，オピニオン・リーダー，メディア）と一般人の行為者との間における〈意味の交渉〉が繰り返される中で再構築され，さらに一つ一つの実践の正統性をコミュニティ内部で確定していくことで，実践としてのコミュニティの姿を可視化させていくという点も注目すべきところである。

一方，サッカー文化にまつわる限られた領域，もしくは「日常文化」たらしめる迂回的なルートを通じて，朝鮮族の人々は民族関係や政治に対するリアルな内面意識を表出していることが見て取れる。この際，サッカーを通じて表出される朝鮮族エスニシティには，「漢族認識」が内在している包摂と排除を含んだ穏やかな結合態としてのローカリズムが反

映されているということも重要な特徴として表れている。

以上で見てきたように，「民族団結」，「民生工程」といった地方政府レベルの言説と中華民族の共同体意識の高揚を前例なく強調している習近平政権以来の「中国夢」言説の狭間で，「朝鮮族サッカー」はアイデンティティ政治の表出空間を生み出してきた。しかし，2019年から中国政府は新疆をはじめとする少数民族地域において，「日常文化」に対する監視・統制にも拍車をかけている[48]。現代中国という政治社会の中で衝突と弾圧だけでなく，寛容と創造につながる回路を備えた矛盾の空間としての「日常文化」の領域に，今後また如何なる形で民族ガバナンスが染み込んでいくか，引き続き注目したいところである。

注

(1) 省級自治区を与えられ，概ね西北部で暮らす，しかも国際的にも話題性に富む「大きな少数民族」たるウイグル族やチベット族，モンゴル族，回族など。澤井充生・奈良雅史編（2015）『「周縁」を生きる少数民族――現代中国の国民統合をめぐるポリティクス』勉誠出版，ⅱ頁。日本の「中国ムスリム研究会」のメンバーによる一連の成果を集約した本書は，中国共産党の国民統合に対して，「周縁」に位置する「主体民族」がどのような認識を持っており，また党支配の回避策としてどのような戦術・戦略を駆使しているのかを詳細に分析している。

(2) 上掲書，vi 頁。

(3) 田辺繁治（2013）『生き方の人類学――実践とは何か』講談社現代新書，11 頁。

(4) 周明甫・金星華編（2006）『中国少数民族文化簡論』民族出版社。

(5) 金星華編（2004）『民族文化理論与実践（上册／下册）』民族出版社。

(6) 紅桂蘭（2019）『中国における少数民族文化活動に関する研究――モンゴル族にみる民族文化と国民統合』 筑波大学博士学位論文，18 頁。

(7) 別所裕介（2015）「現代チベットにおける民族運動と「不殺生」の位相――アムド地方におけるラカルの実践の事例から」澤井・奈良編上掲書。

(8) 小西賢吾（2015）「「周縁」を生き抜く僧侶たち――四川省チベット社会におけるボン教僧院の事例から」澤井・奈良編上掲書。

(9) 奈良雅史（2015）「遍在する「周縁」を動く回族――雲南省における地域横断的なイスラーム学習活動の事例から」澤井・奈良編上掲書。

(10) David R. Stroup (2022). *Pure and True: The Everyday Politics of Ethnicity for China's Hui Muslims*. Seattle: University of Washington Press.

(11) 有元健（2012）「スポーツとナショナリズムの節合について」『現代スポーツ評論』（第 27 号），35 頁。

(12) John Hughson and Fiona Skillen eds. (2014). *Football in Southeastern Europe: From Ethnic Homogenization to Reconciliation*. London and New York: Routledge.

(13) David Hassan ed. (2013). *Ethnicity and Race in Association Football: Case Study Analyses in Europe, Africa and the USA*. London and New York: Routledge.

(14)　Kausik Bandyopadhyay ed.(2013). *Why Minorities Play or Don't Play Soccer*. London and New York: Routledge.

(15)　ibid., 22.

(16)　佐藤健二・吉見俊哉編（2007）『文化の社会学』有斐閣，10 頁。

(17)　佐藤・吉見編上掲書，13 頁。

(18)　富山太佳夫（1998）「突出するホール」『現代思想』(1998 年 3 月臨時増刊号)，171 頁。佐藤と吉見は，ある文化現象を支えている「場」に対する認識を入れ込めない限り，個々の事物や事件という直感的表象から，分析すべき対象の認識を生み出すことができないと指摘している。後述するが，このように文化を「場」として捉える視点は，富山の発想を受け継ぐものと考えられる。佐藤・吉見編上掲書，9-10 頁。

(19)　佐藤・吉見編上掲書，9 頁。

(20)　面談，聞き取り調査は，東京在住の KJ さんを除き，すべてオンラインで実施した。構造化インタビューのように事前に用意された質問に依拠することなく，オープンエンドな質問を投げかけるなど，自由な雰囲気の中で会話中心の調査（Skype ビデオ通話）を行った。また，第 2 次調査も，新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミック下において，すべてオンライン上で実施した。

(21)　延辺現地，延辺以外の国内地域，海外（日本，アメリカ，シンガポール）など。

(22)　教師，公務員，作家，記者，個人事業者，会社員など。

(23)　1 部（甲 A リーグ）とは，1994 年から 2003 年まで存在した中国プロサッカーリーグの最上位ディビジョンであり，2 部（甲 B リーグ）は 2 番目のディビジョンである。2004 年度から，中国サッカー協会はプロサッカーリーグの体制を再編した。1 部リーグを「中国超級リーグ」（中国スーパーリーグ），2 部リーグを「中国甲級リーグ」，そして新たに創設した 3 部リーグを「中国乙級リーグ」と命名し、3 部構成の新体制で再スタートした。試合はホーム・アンド・アウェーの 2 回総当りで実施しており，リーグ戦最終ランキングの上位 2 クラブは翌年，スーパーリーグに昇格し，下位 2 クラブは乙級リーグに降格する。

(24)　1990 年代の中国サッカー界における黒いホイッスルに関しては，中央テレビの代表的なサッカー番組『蹴球之夜』の延辺サッカー特集「延辺記憶――曽経甲 A，那時中超」（2013 年 1 月 13 日放送）で詳しく取り上げている。また，金青雲主編（2020）『延辺足球百年史』延辺人民出版社にも詳しい。

(25)　後述する質的データにも触れている通り，この時期に現場に通っていたファンたちの証言によるとホーム戦の時さえ 500 人も集まらなかった。

(26)　류청(2019)『박태하와 연변축구 4 년의 기적: 우리 안의 지독한 편견 '연변'을 말하다』브레인스토어，18-24 頁。

(27)　2022 年 7 月に『延辺日報』が企画した「自治州成立 70 周年記念系列報道・延辺サッカー」にも詳しい。「축구의 고향 연변에 다가가다 (4)」『연변일보』（2022.7.26）。

(28)　「習近平参観曼徹斯特城市足球学院」『人民日報』(2015.10.24)。

(29)　2013 年 12 月 30 日に結成。 習近平主席が領導小組・組長を務めており，政治・経済・文化，生態文明，党建設制度など，中国改革の全般を牽引する中国共産党中央の核心指導組織である。「習

近平主持召開中央全面深化改革領導小組第十次会議強調」『人民日報』(2015.2.28)。

(30) 「習近平主持召開中央全面深化改革領導小組第十次会議強調」『人民日報』(2015.2.28)。

(31) 党機関の高位幹部としての彼の文章は，自治州の党関係者やメディア界が，「延辺サッカー」を政治的，「民族的」に如何に認識してきたのかを窺ううえで示唆に富む視点を提供している。

(32) 김태국「아리랑과 더불어 빛나는 연변문화」『길림신문』(2016.1.21)。

(33) 우지위「연변·부덕 축구모델 성공적으로 출항」『연변일보』(2015.12.31)。洪慶州長のサッカーに関する言及は，2022 年 1 月に開かれた人民代表大会の『政府工作報告』にも現れている。この報告で，洪州長は，「延辺の特色あるスポーツ事業を発展させ，全国サッカー発展重点都市を創建する。延辺サッカーの甲級リーグ昇格に成功することで，「サッカーの故郷」の美称を取り戻せるよう努めていくべきだ」と強調した。

(34) 안성호(2016)「문화적 시각으로 보는 조선족과 축구」『한국학연구』41，368 頁。サッカーが朝鮮族の象徴的な文化要素やエスニック表象の手段として普遍的な妥当性を持つという主張を補強するためには，集団内外におけるさまざまな「他者」の視点を取り入れることが重要である。例えば，朝鮮族サッカーが男性主導のスポーツとして捉えられている現状において，女性がどのようにこの文化に関わり，またサッカーファンではない人々がどの程度この集団文化を受け入れているかといった問題を考慮することが求められる。確かに，「民族文化」の観点からサッカーについて語る多くの主体は，本稿で取り上げられている事例や人物から分かるように，概ねサッカーファンやその利害関係者である。しかしながら，すでに出版されている朝鮮族サッカーに関する女性や非サッカーファンの認識や経験を記した文学作品も存在している。例えば，後に触れる自治州党委宣伝部，自治州体育局と H メディアが共同主催した文学公募展の作品集，海蘭江編(2016)『延辺蹴球之恋』(表 3 を参照）である。この作品集には 35 の受賞作品が収録されており，そのうち 16 作品が女性による手記である（大賞受賞者も女性である)。これらの文献は女性や非サッカーファンの視点から，サッカーが「民族文化」という文脈においてどのような役割を果たしているかを理解する上で，示唆に富む洞察を提供している。

(35) ヤン・アスマンの論考は以下を参照。

・Jan Assmann (1995). “Collective Memory and Cultural Identity”, *New German Critique*, No. 65, 125-127.

・Jan Assmann (2008). “Communicative and Cultural Memory”, A. Erll and A. Nünning eds., *Cultural Memory Studies: An International and Interdisciplinary Handbook*, Berlin and New York: De Gruyter, 109-112.

(36) 延辺日報，吉林新聞，中央広播電視総台（SMG）傘下の中国人民放送局朝鮮語放送など。

(37) 中国の IT 大手・テンセント（騰訊）が開発した SNS アプリケーション・微信（WeChat）の機能のひとつ。「公衆号」(公式アカウント）は一種の「サイト」のような機能を果たしている。主要メディアや政府機関は全て「公衆号」を運営しており，各機関のホームページで発信するニュースや通知は直ちにこの「公衆号」と連動される。

(38) 他方で，朝鮮族社会の注目を集める関心ごと，例えば朝鮮族学校における朝鮮語教育の衰退化問題など，政府側にとって敏感な社会問題には一切触れていない。

(39) このシリーズは，2018 年に『延辺サッカーの足跡をたどって』(김룡·안상근·김태국 주편(2018)

『연변축구의 발자취를 찾아서』연변대학 출판사）というタイトルのもとで書籍化された。

(40)　大賞を受賞した作品は，延辺サッカーのエスニック特性を謳歌する『中国の「ビルバオ」――延辺サッカー』というタイトルをつけた作品であった。アスレティック・ビルバオとは，スペインのビルバオ州をホームとするラ・リーガ1部のプロサッカークラブ。1912年以来，選手構成を「バスク人」に限定する「純血主義」方針を貫いている。ビルバオ地域はカタルーニャとともにスペインからの独立を求める地域としても有名である。公募展で分離独立や「純血主義」を唱えるアスレティック・ビルバオに喩えた作品を政治的に問題視せず，大賞に選定した理由は，「延辺サッカーの民族文化的特性を突出させたから（PH記者）」であった。

(41)　こうした，知識としてのサッカー史の普及は，「朝鮮族サッカー」にまつわる現象や実践に文化的記憶の基盤を提供している。

(42)　F. Barth (1969). “Introduction”, F. Barth ed., *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Culture Difference*, Boston: Little Brown and Company, 34-40.

(43)　調査対象者のうち，11人がこの点を強調している。

(44)　こうした視点は，漢族ファンと共有するインターネット掲示板（百度貼吧），サッカー専用アプリ「懂球帝」の「延辺サッカー」カテゴリーで活発に活動する人や管理者を務めている5人（D氏，E氏，F氏，K氏，P氏）に共通点として現れている。

(45)　サッカーチームの朝鮮族要素に同意することを当然な前提としている理由を分析すると，主に①朝鮮族選手を中心としたチーム構成，②朝鮮族サッカーの歴史，③地域サッカー文化の発展における朝鮮族の先導的位置などである。

(46)　2017年の政策変更やクラブの状況，ファン間の葛藤などについては，2015年以降，延辺サッカーを密着取材してきた韓国人サッカージャーナリスト柳青の著書で詳しく記述されている。柳は，韓国人選手や監督が如何に延辺のプロサッカークラブと関係を結び，さらに朝鮮族社会に如何なる影響を与えてきたのかを，現地取材に基づくルポ・インタビュー記事・コラムなどを韓国のNAVERに発表してきた。それらのコンテンツを集めた著書，『朴泰夏と延辺サッカー4年の軌跡――私たちの中の恐ろしい偏見「延辺」を語る』（류청(2019)『박태하와 연변축구 4년의 기적：우리 안의 지독한 편견 ‘연변’을 말하다』브레인스토어）が2019年7月に韓国で出版された。

(47)　「暗黒期」においては，応援文化の実践，つまりコミュニティレベルの文化現象が目立たなかった。本研究の質的調査から分かるように，成績不振やチームの売却がもたらした自治州政府，民族幹部に対する政治的不満などが、その要因として考えられる。

(48)　「日常文化」に対するミクロ管理・統制はすでに新疆ウイグル自治区で実施されている。シェフィールド大学・東アジア研究所のTobinは，新疆政策の成功に政治体制の正当性をかけている習近平政権が，日常文化を安保アジェンダに組み込み，さらに大量の人員を動員し監視を行いながらウイグル族住民の日常的な活動に対するミクロ管理を展開していると指摘している。管理対象としての「日常文化」には，「禁酒，禁煙」および「ダンベル，ボクシンググローブなどの購入および保管」など，「75の極端主義現象」と規定した項目が取り上げられている。具体的には，D. Tobin (2022). *The “Xinjiang Papers”: How Xi Jinping Commands Policy in the People’s Republic of China.* The University of Sheffieldを参照されたい。